

益田市市長  
山本浩章

中学生にして破竹の29連勝を達成し、その後も快進撃が続く藤井聡太七段や「出雲のイナヅマ」の異名を取る里見香奈女流四冠などの活躍で将棋が脚光を浴びています。

縦9列、横9行、計81マスの将棋盤に先後手各20枚の駒を並べて対局を開始する将棋は、誰でも楽しめるボードゲームの代表格です。この将棋をモチーフとする演歌の一つが、大阪を拠点に活躍した八方破れの天才棋士・阪田三吉の闘志を描いた昭和36年発表の「王将」です。

「吹けば飛ぶよな将棋の駒に」。あとに「賭けた命を笑わば笑え」と続く冒頭の一行が書けたとき、作詞家の西條八十は会心作の確信を得たといえます。傍から見れば取るに足らぬ盤上の闘いに血眼になる男の生き様は、薄紙一枚に渾身の情熱を注いで歌詞を刻む自分の姿と重なるものでした。

二番の歌詞の結びは「愚痴も言わ

ずに女房の小春こはる、つくる笑顔がいじらしい」となっています。小春とは三吉の妻のことですが、西條自身長年苦楽を共にした妻晴子はるこを亡くしたばかりで、いわば人知れぬ鎮魂歌でもありました。

三番は「明日は東京に出て行くからは、なにがなんでも勝たねばならぬ」で始まります。東京での大一番にかける意気込みに加え、華やかな首都に対する地方の反骨心まで伝わってくるようです。

この詞に曲をつけた船村徹は新進気鋭の作曲家でした。ただ、演歌はクラシック音楽などと比べ低俗な大衆芸能という扱いを受けており、あえてその道に邁進する心意気をそのままメロディーに乗せることができたのです。

そして、歌ったのは、売れっ子浪曲師から心機一転演歌歌手に転じた村田英雄でした。もう後がないという必死の念が、持ち前の野太い声に一層の迫力を加えました。

このように、関わる人それぞれの情念を深く宿した「王将」は、誰にも言えない悩みや辛さを胸に秘め日々懸命に生きる多くの庶民の圧倒的共感を呼び、戦後初のミリオンセラーとなりました。日本歌謡史上に残る名曲はこうして誕生したのです。

## 中世益田講座「益田氏 VS 吉見氏」(全7回)

### 第3回 益田氏・陶氏 VS 吉見氏

【問い合わせ先】市文化財課 ☎31-0623

室町時代も中頃を過ぎ、室町幕府の支配が動揺し始めた頃、益田氏と吉見氏の対立も激しさを増していきます。そして、隣国周防・長門ながと(山口県)の大名大内氏とその重臣陶氏すえが関わることにより、その対立は西日本の政治史にも影響を与えることになりました。

応仁・文明の乱に際して、大内氏は西軍方(足利義規・山名宗全ら)が当主と認める政弘方と、東軍方(足利義政・細川勝元ら)が当主と認める嘉々丸の父道頓みちとん(教幸)方に分かれ、内戦状態になりました。西軍方の当主政弘は大軍を率いて上洛しており、当初、国元では道頓方が優勢でした。しかし、大内氏の重臣陶弘護ひろもりが政弘方について道頓を攻撃し、道頓は敗れて石見に落ち延びます。それでも依然として道頓方の勢力は大きく、吉見氏、三隅氏、周布氏、小笠原氏などが味方していました。

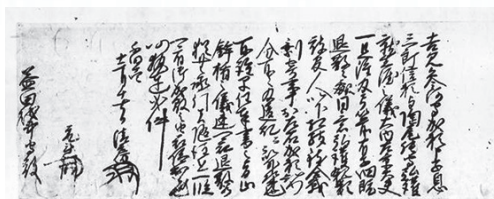
このとき、陶弘護と連携して道頓方を破るのに活躍したのが益田貞兼さだかねでした。貞兼の姉妹が陶弘護に嫁いでおり、二人は同盟関係にありました。その背景には、長野庄しのぶ(高津川下流域)をめぐる益田氏と吉見氏の対立、徳佐や徳地(山口市東北部)をめぐる陶氏と吉見氏の対立があり、益田氏と陶氏は

吉見氏を共通の敵として、利害が一致していたのでした。

政弘方と道頓方の対立は弘護と貞兼の活躍により、政弘が当主の地位を確立します。そして、陶弘護は大内氏重臣筆頭の地位を占め、貞兼も川島や大井(萩市)に領地を大内氏から預けられます。一方、吉見成頼なりよりは政弘方に降伏し、なんとか許されます。

このときの遺恨があったのか、文明14(1482)年、大内氏の館での宴会中に弘護は吉見信頼(成頼の子)に刺殺され、信頼もその場で殺害されます。その後、陶氏、益田氏は吉見氏を攻撃し、室町幕府に制止されています。

この益田氏・陶氏対吉見氏という構図が、以後もこの地域の政治の重要な軸となります。



東京大学史料編纂所蔵「益田家文書」の室町幕府奉行人連署奉書。室町幕府は、陶弘護を刺殺した吉見氏に対する報復をやめるよう、益田氏に伝えています。